

## 共同研究

# 「動物考古学の基礎的研究」について

西 本 豊 弘

考古学の中で遺跡から出土する動物遺体を扱う分野を「動物考古学」と呼ぶようになってからまだあまり時間が経っていない。日本においても、この分野の研究者がようやく増えてきた状況である。これは、緊急発掘が多くなり動物遺体の出土量が急激に増えたことと関連している。また、一方では発掘が丁寧に行われるようになり、小さな魚骨などが意図的に採集されるなど、発掘そのものの質的变化によって、動物遺体のもつ意味が認識されはじめたことも事実である。動物遺体の出土量が増加し、研究者がある程度増えたことは良い傾向ではあるが、種同定や研究法での協力など、これまで以上の研究者間の協力が必要となっている。そこで、動物考古学を進めていくにあたり、現在どのような問題があるのかを話し合うために、1986年度と1987年度の2ケ年にわたり、国立歴史民俗博物館では「動物考古学の基礎的研究」というテーマで共同研究を行うこととした。各地に分散して様々な研究を行っている方々の意見交換の場としたことも考えたわけである。しかし、予算の都合で動物遺体の研究を行っている方に総て参加していただくことができないので、関東地方在住の研究者を中心に集まっていたいただき研究会を開き、参加者の方々に方法論を中心に発表と議論をお願いした。2年間という短い期間と限られた人数のため、動物考古学に関する問題を十分に議論することはできなかったが、参加者の多くの方から発表をもととした論文をまとめていただくことができた。また、研究会の参加者以外の方々からも論文を投稿していただいた。この共同研究は、日本の考古学の中で、これまであまり注目されていなかった動物遺体の研究を、考古学全体の研究の中で認識していただくように努力することも目標のひとつであった。本報告書の刊行によって、その目的をある程度果たすことができるのではと願っている次第である。

研究組織と研究会の内容は、巻末にまとめたとおりである。それぞれの研究者が当時に関心を持っていたテーマを中心に発表していただいたために、動物遺体に関する基礎的な問題を網羅的に話し合ったわけではない。もっと多くの方々によって、もっと多くのテーマについて発表や討論を行うべきであったかもしれない。さらに、時間的制約等により、今回の共同研究で論文にまとめられたものは、限られたテーマになってしまった。本報告書は、各研究者の論文の寄せ集めであり、基礎的研究にもなっていないかもしれないが、このようなテーマで話し合いの場を持ち、様々な問題があることを認識したことを成果としたい。この共同研究の報告書

共同研究「動物考古学の基礎的研究」について

は二分冊の予定であり、金子浩昌氏の研究史と西本・松井編の動物考古学に関する文献集成は、1991年度に刊行する予定である。

なお、研究会ではメンバーでない多くの方々にも発表をいただいた。そして、東北歴史資料館・石川県考古学研究会・石川県埋蔵文化財センター・能都町教育委員会の方々には研究会の開催について大変お世話になった。共同研究員の方々をはじめこれらの皆様の協力なしにはこの共同研究は実施できなかったであろう。皆様に深く感謝致します。